

群 教 セ	E03 - 03
	平 15.213集

互いに協力し合う学級づくり

「にこにこ2組パワー・レベルアップ大作戦」活動と その振り返りを通して

特別研修員 赤石 清美

研究の概要

本研究は、小学校3年生を対象に「学級の協力パワー」のレベルアップを目指した活動とその振り返りを通して、互いに協力し合う学級づくりができることを実践を通して明らかにしようとしたものである。具体的には、学級生活を充実したものにする係活動、学習の上達をねらう教え合い活動、イベント的活動の場において、自分たちでめざす目標をつくり、その目標達成のための活動を考えて実行し、取組を振り返る活動を行った。

【キーワード：学級経営 小学校 学級活動 学級づくり 協力】

主題設定の理由

子供たちにとっての魅力ある学級とは、

「こんな学級にしたい」というめざす学級像（目標）を自分たちでつくり、その達成にむかって自分たちが協力して活動し、やり遂げた喜びや満足感を味わえる
「励まし合い」「学び合い」によって、共に成長していくことができる

学級であると考え、子供たちから「このクラスでよかった。」という声が出る学級になることが理想的な学級づくりである。この時期（小学校中学年）の児童は仲間意識がうまれて一緒に行動するようになるが「自己中心的な行動」をし、視野が狭い傾向にある。したがって魅力ある学級づくりには「よりよい仲間関係の在り方」「集団を意識した活動の仕方」を指導することが学級経営上、重要なポイントになると考える。

本学級（小学校3年生 男子20名 女子13名）の児童はクラスの良いところを「あいさつをちゃんとする」「時間を守る」「良くない行動を注意し合える」とあげている。また学級での協力については、早く整列できているところ、掃除、給食の配膳、という活動をあげている。一人一人は、よりよく生活しようという意識をもって生活していることがわかる。しかし、これらは「自分がしっかりやらなければならない活動」であり、「助け合っている」「力を合わせている」といった集団を視点にした評価はほとんど出てこない。みんなで力を合わせるといった集団の意識はまだ薄い。そのため、常に集団を意識する活動が必要である。さらに、その活動を自分たちで決定していくことも必要である。自分たちで集団に対する目標をきめ、自分たちで創意工夫をして活動を考える。そして振り返った時にやりとげた実感が得られる。そのような活動を行うことで「学級は自分たちのものである」「自分たちの力を合わせて学級をつくっていく」という自覚が育ち、まとまりのある学級になると考え、本主題を設定した。

「にこにこ2組パワー・レベルアップ大作戦」の取組の場には、児童の創造的な考えが生かされる係活動の場面と学習に関する活動の場面、イベント的活動の場面を取り入れていきたい。また、中学年では最初から学級全体で取り組むのは広範囲すぎて難しいので、まずは小集団での取組を考える。活動目標の必要性に気づかせ、その達成によって集団で取り組む楽しさがわかってくる。その楽しさを実感させることで多くの仲間とかかわってもっと活動したいという意欲を引き出す。そこから活動の場を小集団から学級全体に広げていきたい。

研究のねらい

「にこにこ2組パワー・レベルアップ大作戦」(学級活動・常時活動・授業)において、小集団や学級で目標をつくって、その達成にむけた作戦を実行し、個人や集団でその取組の振り返りを行うことにより、互いに協力し合う学級ができることを、実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 学級活動 [(1) - ウ]と常時活動(係活動)での「お仕事でレベルアップ作戦」において
 - (1) 「3年2組係改造計画」として係を新編成し、活動の目標をきめる。
 - (2) 係ごとに活動方法を計画し、「お仕事チャレンジ宣言」をして係活動を行う。
 - (3) 活動後、チャレンジ宣言の取組度を評価して活動の振り返りを行う。これらのことにより、集団で取り組むことに喜びを感じることができよう。

- 2 学級活動 [(1) - ウ]と授業での「チームでレベルアップ作戦」において
 - (1) 「教えて欲しい学習アンケート」をもとに「教え合い」の活動・目標を設定する。
 - (2) コーチを中心としたチームを編成し、活動方法を考え、「チームチャレンジ宣言」をして活動する。
 - (3) 活動後、チャレンジ宣言の取組度を評価して活動の振り返りを行う。これらのことにより、集団での学び合い、励まし合いによって、できなかったことができるようになる素晴らしさを感じることができよう。

- 3 学級活動 [(1) - ウ]と短学活での「もっとレベルアップ作戦」において
 - (1) 今までの作戦による学級の変化(学級の良いところ)を話し合い、集団としてのプラス面をさらにアップさせるこれからの目標を設定する。
 - (2) 目標達成に向けての活動方法を考え、実行する。
 - (3) 活動後、取組度を評価して活動の振り返りを行う。これらのことにより、みんなで力を合わせることで学級がまとまってきたという充実感を味わうことができるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え

- (1) 「互いに協力し合う学級」とは

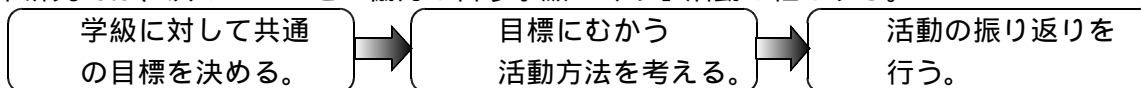
「協力し合う」関係には「互いの良いところも悪いところも認め合い」、「互いの弱い部分を励まし合い」、そして「一人一人が自分のできることをして、互いを補い合う」関係がある。学級とは集団であるから「協力し合う」相手が集団を意識したものになる。

協力し合って活動に取り組んでいくと、

みんなで取り組むことに喜びを感じる できなかったことが「できる」ようになる素晴らしさを感じる みんなで力を合わせることで学級がまとまってきたという充実感を得られる

といったよさが実感できる。このよさを実感できると、「自分たちで楽しい学級をつくっていかう」という意欲が高まってくると考える。

本研究では、次の を「協力し合う学級づくり」活動の柱とする。



この流れを子供たちに意識づけ、子供たち自身がこの流れにそって活動を決定していくことにより「自分たちで作りあげていった学級」という意識をより強いものにする。学級みんなで目標にむかっていこうとする、まとまりのある学級になっていくと考える。

(2) 「にこにこ2組パワー・レベルアップ大作戦」とは

「にこにこ2組」とは本学級のキャッチフレーズである。にこにこ笑顔がたくさんあふれる学級にという願いが込められている。学級目標や学級通信のタイトルにも使用しており、児童にとってはいつも意識されている言葉である。

「パワー・レベルアップ」の意味はここでは「協力」という「力=パワー」を自慢にレベルアップしようと考えて名付けたのである。事前に「にこにこ2組の自まん」アンケートを行った。その結果、「楽しさ」「明るさ」「元気さ」「がんばり」「やさしさ」はポイントが高かったため、自慢できると児童は判断した。ポイントが低く自慢できないとしたのが、唯一「協力」であった。児童は「協力も自まんにレベルアップしたい」という意欲をもったのである。

活動の場としては、児童があげた「クラスの仕事」「学習の教え合い」を取り入れ、次の3つの作戦を実施していく。

<お仕事でレベルアップ作戦>とは

「仕事面での協力をレベルアップしたい」ための活動（作戦）である。学級内での仕事は当番・係があげられるが、児童が意欲的に取り組める活動、創造的な考えがいきる活動というよさから係活動での取組にする。「3年2組係改造計画」と題して新しい係編成を行い、活動の目標を明確にして係ごとに仕事のチャレンジ計画を宣言する。その宣言をもとに取り組むメンバー同士で協力し合ってクラスのために仕事をする。そして取組を振り返ることで、集団で活動に取り組むことに「楽しい」「もっとやりたい」といった喜びを感じる作戦である。

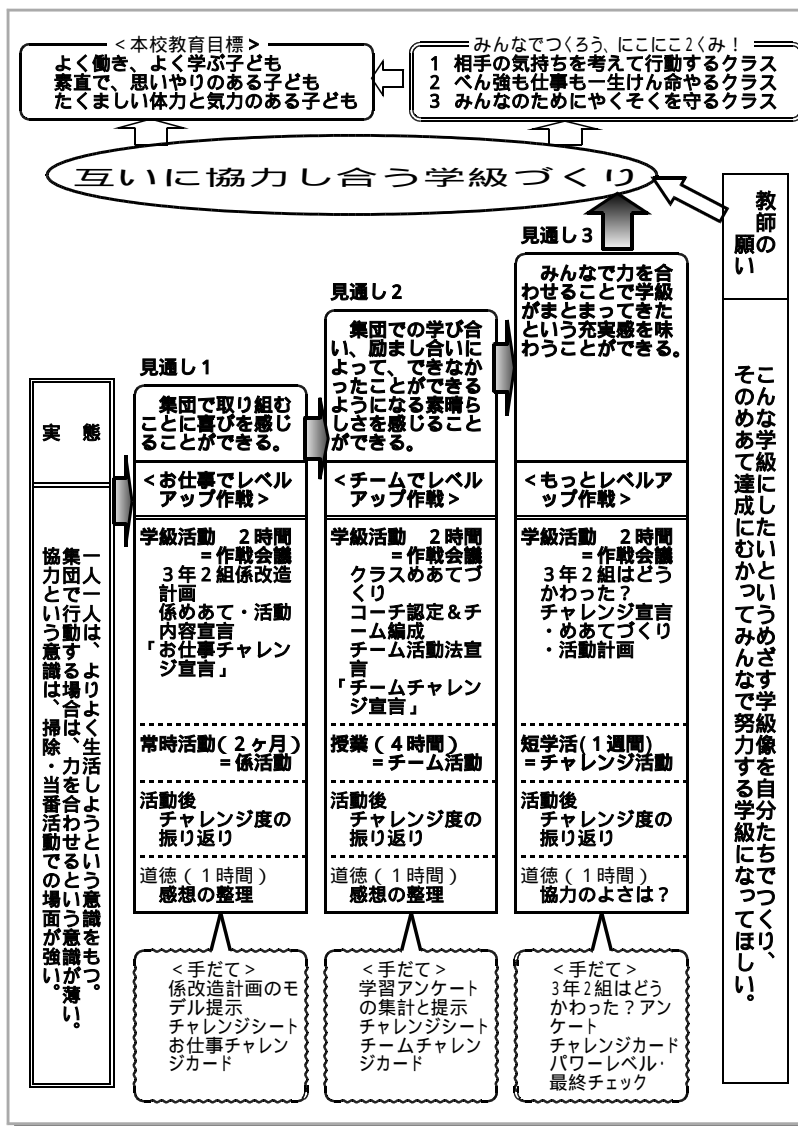


図1 研究の全体構想図

<チームでレベルアップ作戦>とは

「学習の教え合いで学級の協力をレベルアップしたい」ための活動（作戦）である。学級全体で成果をあげたい学習について話し合う。その学習のクラス目標をつくり、達成のためには、その学習が得意な児童が中心になって教え合う。得意な子を「コーチ」として認定し、「コーチ」を中心に「学習チーム」を編成して活動方法のチャレンジ計画を宣言する。その宣言での活動を実行し、めあて達成の成果と活動の取組を振り返ることにより、協力のよさである「教え合い・学び合いによって、できなかった（わからなかった）ことができる（わかる）ようになる」素晴らしさを感じる作戦である。

<もっとレベルアップ作戦>とは

の作戦をもとに良くなっていった学級が、さらに充実してまとまっていく、すなわち「もっとレベルアップしていく」ための活動（作戦）である。学級全体がこれから目指していく目標を決め、その達成のための活動を考えていく。今回の活動は小集団ではなく、学級全体で取り組める活動を考える。作戦の実行後は取組を振り返り、みんなで力を合わせて取り組むことで「学級がまとまっていった」充実感を味わう作戦である。

2 実践の概要及び結果と考察

検証にあたっては、学級全体と抽出児A子（「協力するといいいところは？」の問いに対し、「給食（の用意）が早くおわる」「クラスがよくなる」とコメントした児童である。）のアンケートや活動時の観察、振り返りカードの記述を中心に行った。

(1) 集団で取り組むことに喜びを感じる事ができたか。（見通し1）

ア 実践の概要

資料1は「今までの係活動ではどんな気持ちで取り組んでいた？」という事前のアンケートである。係とはいつもの与えられた当番活動的な仕事ばかりだったために、意欲のもてない児童が33人中17人とほぼ半数いた。そこで、

学級活動 「3年2組係改造計画」において係のモデルを提示し、新係編成を行った。「係活動は誰のために、何のためにするのか？」という問いかけをし「みんなのために」「クラスを楽しく、よくするために」活動することを学級全体で明確にした。

学級全体の目標をもとに、係ごとに活動計画をたてた。

目標を具体化した。

目標達成のために何をするのか仕事内容を決めた。

たてた計画を「お仕事チャレンジ宣言」として係シートに書いて宣言した。（資料2を参照）係シートは教室掲示した。常時活動においても「お仕事チャレンジ計画」を立て、それをもとに係活動を行った。表1は、各係の活動計画を示したものである。

資料1 今までの係活動での取組

積極的 思考	・がんばってやるぞ。	8人
	・楽しい。	6人
	・早くやろう。	1人
	・かんたんだ。	1人
消極的 思考	・ただやってた。	6人
	・毎日やんなくちゃ。	4人
	・つまんない。	4人
	・大変だ。やだな。	3人

資料2 お仕事チャレンジ宣言シート

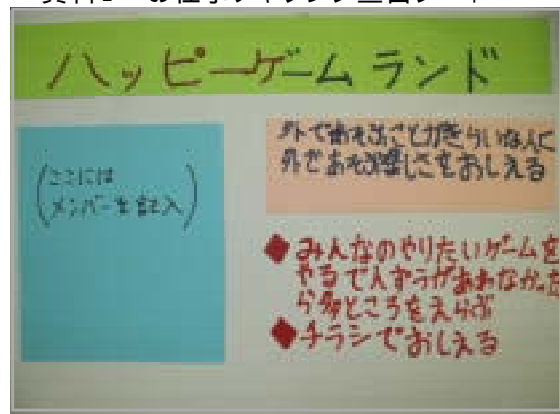


表1 係改造計画一覧

係名	活動のめあて	活動内容
スポーツ2組 新聞社	2組の人のことをみんなに知らせる。	2組のいいところをインタビューして書く。1週間に1回出す。
何でも美術館	絵やおし花の楽しさを知ってもらう。	絵をかいてかざる。おし花をつくってかざる。ぬりえ大会をしてみんなの絵をかざる。
読み聞かせの会	みんなに本を好きになってもらう。	木曜日の朝活動でやる。係が1さつずつ読み聞かせる。読んで欲しい本のアンケートをとる。
インテリア デザイナー	教室をきれいにしてお気持ちよくする。	教室をそうじする。花をかざる。小物をつくってかざる。
お楽しみ クイズ	みんなに楽しんでもらう。	火・水・木の帰りの会でやる。なぞなぞ、×クイズを中心にやる。
何でもランキン グトップ10	みんなに楽しい思いをしてもらう。	1週間に1回アンケートをとって、けっかをポスターみたいに教室にはる。
にこにこ かんごし	クラスにけんこうな人をふやす。	けがをしないように、よびかける。じきゅう走大会の前に、けんこうチェックをする。
ハッピー ゲームランド	外あそびをすきになってもらう。	みんなにやりたいゲームのアンケートをとる。多いゲームを中心にきめて、チラシでやる日やルールを知らせる。
ラッキー ゲームランド	ゲームでみんなを楽しませる。	点数をきそうゲームを中心に作る。帰りの会で時間をとってゲームをしてもらう。
みんなの ゲームランド	ゲームでみんなを楽しませる。	めいろゲームやパズルゲームを中心に作る。チラシを書いてみんなにやる日を教える。

係の活動後「お仕事チャレンジカード」(資料3)

によって「チャレンジ計画の取組はどうだったか」を「いくつ?」で評価し、「活動にチャレンジして思ったこと・考えたこと」を自由記述した。

イ 結果と考察

写真1は教室掲示の様子である。今までは係からの連絡というと口頭での方法だけであった。したがって学級全体に落ちなく伝えることは難しかった。「みんなに忘れられないように上手に伝えられる方法はないかな?」と問いかけたところ「チラシを書いて掲示しておく」ことを子供たち自ら考えて実行し始めたのである。書く内容も、相手の知りたいことは何か?自分たちで考えて書いたものである。また、係コーナーを設けていても「 を忘れないでください。」という言葉ばかりが記述されていた。この活動によって教室の壁面活用も、自分たちから「 を貼りたい」と申し出て

次々と掲示していった。各係が係活動に意欲をもって取り組んでいったといえる。

宣言後に各係が活動に取り組んで記述していった「お仕事チ

資料3 お仕事チャレンジカード

() お仕事チャレンジカード
 法政のお仕事チャレンジ対かく NO. _____
 今年のお仕事チャレンジ記録…… ☆ ☆ ☆
 チャレンジして思ったこと・考えたこと……
 名前 _____

写真1 教室掲示の様子



「チャレンジカード」内の感想を、整理した図が資料4である。

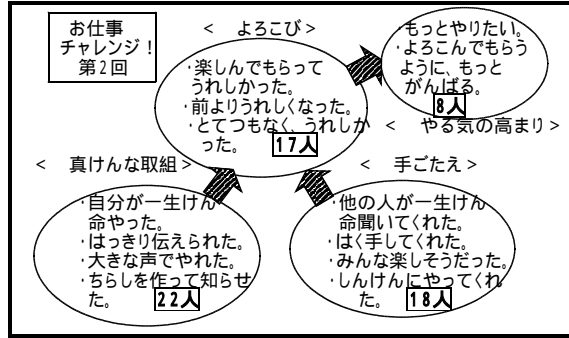
22人の児童が「自分は係活動を一生懸命やった」と記述している()。自分たちで活動内容を考えたことが意欲をもって取り組むことにつながったといえる。その取組に対して18人が、「みんな楽しそうだった」という手応えを感じ()、それが「うれしかった」と記述している()。みんなのためにやったことが、自分の喜びになっていくことに気づいたといえる。そして喜びが、「もっとやりたい」「もっとがんばりたい」という意欲()を生み出したのである。

資料5はA子の意欲の変容を追ったものである(A子は「何でも美術館」に所属)。今までは「(係の仕事は)毎日やらなくては」とあり義務感によって係の活動に取り組んでいたことがわかる。

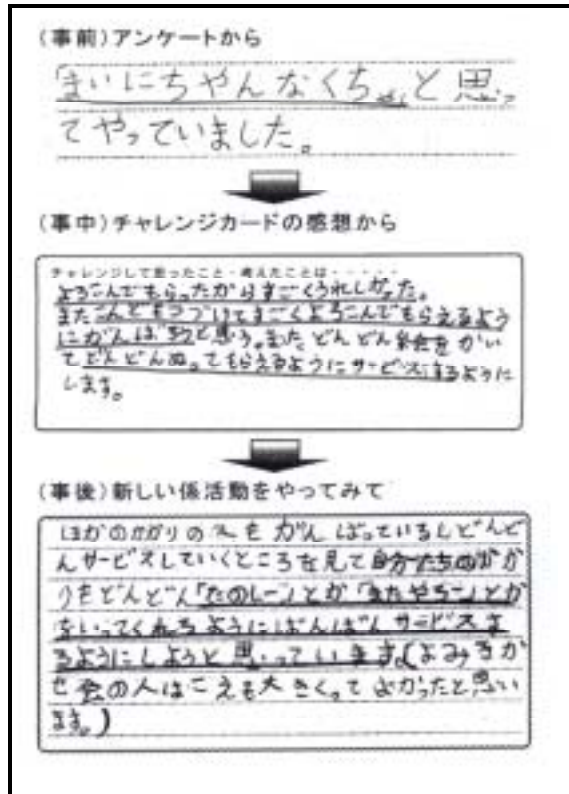
しかし、このチャレンジを続けていくうちに「よろこんでもらえてすごうれしい」と記述するようになった。活動に対して喜びを感じるようになったことが読み取れる。さらに「これからもよろこんでもらえるようにがんばろう」という記述があり、相手の充実感を考えて自分は仕事をすると意欲が高まってきたことがわかる。チャレンジ後の感想では「ほかのかけりもがんばっている」という記述がみられる。他の集団の活動を見る目が育ってきたことがわかる。

学級全体で事後の「新しい係活動をやってみて」の感想とチャレンジ前の取組の気持ちとを比較してみた(資料6)。「係の仕事は楽しい」と記述した児童が、事前の6人から15人に増えた。自分たちでめあてを決め、自分たちで活動を考えてやったことにより、今まで以上の充実感を感じるようになったことがわかる。それだけでなく「みんなを楽しませようとしてやってきた」という、集団を意識して活動するようになったことを記述した児童が0人 8人、「みんな話し合っている」「力を合わせている」という、同じ集団内で力を合わせて取り組むようになったことを記述した児童が0人 6人となったのである。「クラスを楽しくよくするため」という、集団を意識して活動しようとする気持ちが育ってきたといえる。

資料4 チャレンジカードの感想の整理



資料5 抽出児A子の意欲の変容



資料6 チャレンジ前と後との感想の比較

	上段: チャレンジ前	下段: チャレンジ後
がんばってやってる	8人	17人
係活動は楽しい	6人	15人
ただやってる	6人	0人
毎日やらなきゃつまらない	8人	0人
みんなを楽しませよう	0人	8人
みんなで力を合わせている	0人	6人

以上のことから、集団で取り組むことに喜びを感じることができたといえる。

(2) 集団での学び合い、励まし合いによって、できなかったことができるようになる素晴らしさを感じることができたか。(見通し2)

ア 実践の概要

事前に「何を教えて欲しい?学習アンケート」をとった。資料5はその集計の結果である(上位順)。これをもとに

学級活動 において「教え合っ
て上手になって、クラスとしてど
うする?」という「教え合い」の

活動の目標を話し合った。意見として、「リコーダーが上手になって、隣のクラスや1・2年生、親に発表する」「計算がはやく正しくできる方法を知って、計算大会を開く」「音読が上手になって発表会をする」等が出た。結果として「2組みんなでボールの投げ方・取り方が上手になって、1組にポートボールの試合で勝とう!」ということになった。そこで、ボール運動の教え合いに決定した。

その目標を達成するためには、どんな「教え合い」活動をすればいいのか話し合った。話し合いの結果、

ボール運動の得意な子が苦手な子に教える。
得意な子の決定は立候補・推薦にする。
11人が決定。

得意な子11人を「コーチ」と呼び、コーチ
中心に活動班「チーム」を編成した。
チーム人数はコーチ含めて3人。
割り切れるし、3人がやりやすいからとい
う理由で、くじ引きで編成した。

チームごとに活動の方法(授業以外の活動
時間と練習内容)を決めた。
決まったことは「チームチャレンジ宣言」
(資料8)として教室掲示した。

活動後、「チームチャレンジカード」(資料9)に
よって「チーム宣言の取組がどんなふうによかった
か」を「いくつ?」で評価し、活動の感想を自由
記述して振り返りを行った。

イ 結果と考察

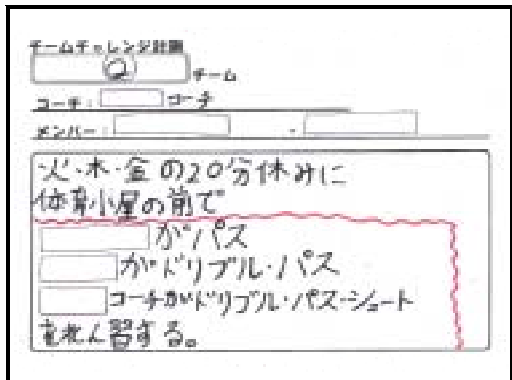
資料10は、活動後に記述していったチームチャレ
ンジカードの感想を、道徳の時間で整理した図である。

26人の児童が「教え合い」により、上手にボールの
扱いができるようになっていったと実感している()。
しかし「教え合い」の効果は、技の上達それだけにと
どまっているわけではないことも記述している。技が

資料7 事前の「教えて欲しい学習アンケート」

- | |
|---|
| 1. リコーダーのきれいな音の出し方・・・18人 |
| 2. すばやい計算の仕方・・・・・・・・・・16人 |
| 3. 上手な跳び箱の跳び方・
上手なマット運動の回り方・・・・・・・・16人 |
| 4. 上手なボールの投げ方・取り方・・・・・・・・11人 |
| 5. 恥ずかしながらできる
音読・スピーチ・・・・・・・・・・10人 |

資料8 チームチャレンジ宣言書



資料9 チームチャレンジカード



アップ(上達)することにより「もっと上手になりたい」という、上達をねらう気持ちがアップ()したことも記述している。

さらに上達の要因として「コーチの教え方のうまさ」()があると記述している。

「教え合い」をすることは、自分の力を向上させることと、チームワークをよくすること()につながっていくことに、学級が気づいていったといえる。

A子の変容を見ていくと(資料11)、始めは「よくできた」という、活動に対する取組の姿勢のみの評価にとどまっている。

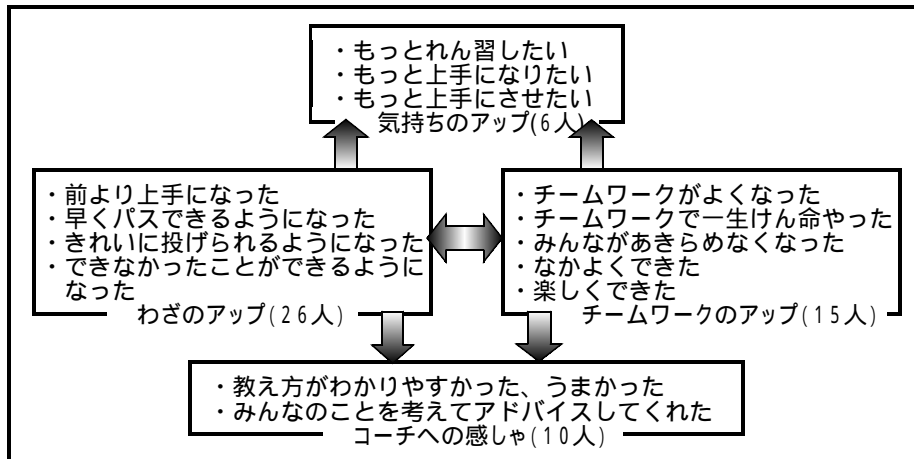
それが次の振り返りでは「上達してきた」と記述している。「できなかったことができるようになってきた」ことに気づき始めたことがわかる。加えて技の上達の要因を「コーチの教え方がうまいから」とし、教えてもらうことによって上達していったという「教え合い」のよさを実感したといえる。

さらに活動していくうちに「チーム」という言葉を記述するようになった。A子は活動を重ねるにつれ、「教え合い」による集団の力の向上を感じるようになったといえる。

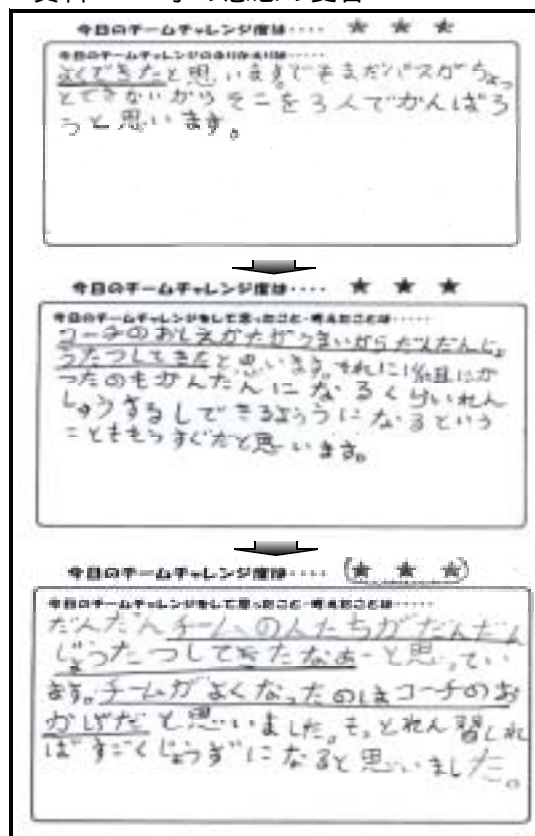
事後に「チームでレベルアップ作せんをやって良かったことは？」アンケートをとった。「できなかったことが上手になったこと」を半数近くの児童(33人中17人)が記述した。

そこでチャレンジ前と後で、「ボールの扱い方の上手レベル(自分と学級みんな)」を3段階評価した(資料12)。自分自身の評価もみんなに対する評価もチャレンジ後には、レベル3が圧倒的に増えた。この作戦で目標としたことは「ボールの投げ方・とり方が上手になって、1組との試合に勝とう」

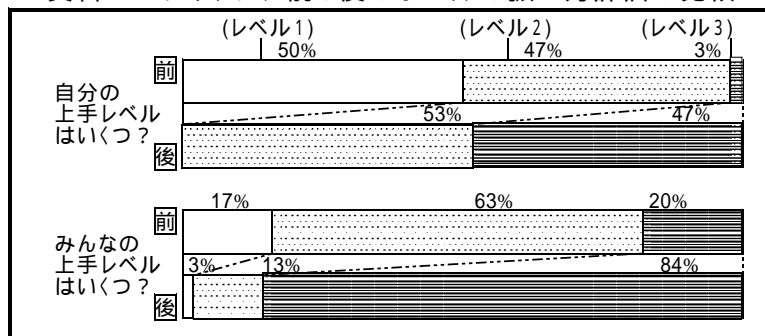
資料10 チャレンジカードの感想の整理



資料11 A子の感想の変容



資料12 チャレンジ前と後のボールの扱い方評価の比較



であった。試合の結果は、6試合中3勝3敗の引き分けに終わった。児童の気持ちの中では、勝つという目標の達成は十分でなかったが、この評価から、試合の勝ち負けよりも「できなかったことができるようになった」「みんな一生懸命やった」ことの方が、作戦の成果として強く心に残ったことがわかる。

以上のことから、励まし合い、学び合いによって、できなかったことができるようになる素晴らしさを感じることができたといえる。

(3) みんなで力を合わせることで学級がまとまってきた充実感を味わうことができたか。
(見通し3)

ア 実践の概要

資料13 2つの作戦によって、良くなってきたところ

「お仕事でレベルアップ作戦」「チームでレベルアップ作戦」によって学級が変わってきた(よくなってきた)ところを事前にアンケートにとり、整理して提示した(資料13)。それをもとに、

個人の変容	集団の変容
<p>できなかったことが、できるようになった。 自分の仕事をちゃんとやるようになった。 人の意見も聞くようになった。 相手の心を考えるようになった。 けんかがなくなってきた 楽しくやれるようになった。</p>	<p>協力ができるようになった。 助け合うようになってきた。 チームワークがよくなってきた。 みんなでがんばるようになった。 クラスが楽しくなってきた。 他のグループ活動もよくなってきた。</p>

学級活動 において、これからの学級のめざす目標を話し合った。話し合いの結果「クラスみんなで一つのことをやって、協力をもっとレベルアップさせる」にきまった。

目標を達成するためにはどんな活動をすればいいのか話し合った。今までは小集団での活動だったが、今回は学級全体で一つのことに取り組むということで、「長なわとびチャレンジ」に決定した。

具体的なチャレンジ計画は、

長なわチャレンジ目標は「ひっかからずに55回とぼう」。

チャレンジタイムは毎日15分間。朝の短学活の時間に行い、期限は1週間。

チャレンジ活動後、「長なわチャレンジカード」

(資料14)によって「長なわとびのチャレンジの取組はどうだったか」を「いくつ?」で評価し「活動にチャレンジして感じたこと・考えたこと」を自由記述した。

活動終了後「にこにこ2組パワー＝協力パワー」の最終チェックを10点満点で評価、「にこにこ2組パワー・レベルアップ大作戦」前の採点と比較して「にこにこ2組の自まん」になったか検討した。

イ 結果と考察

資料15は、チャレンジ活動後に記述していた「長なわチャレンジカード」の感想を、目標回数についてチャレンジの取組について整理し、その変容をみたものである。

1回目のチャレンジでは29回しか跳べなかった。自分たちの取組に対して「もっとれん習しないと」という記述をしている。しかし、集団としての取組に関す

資料14 長なわチャレンジカード

る記述はみられない。思ったよりも少なかった回数に、初めは個人の努力不足に着目していたといえる。それでも、やればできることを信じてあきらめず「次はがんばらなきゃ」という前向きな気持ちをもっていたことがわかる。

チャレンジを続けていくと確実に回数が増えてきた。学級みんなのまとまりを評価する言葉「チームワーク」「はげまし合い」「力を合わせた」「きょうかし合えた」が記述されるようになった(――部分)。みんなが目標達成にむかって一つになっていったことを実感していったといえる。

そして、目標回数55回をはるかに上回る90回を達成したときは、やり遂げて感動した児童の過半数(29人中20人)が、学級のまとまりを確信したといえる。

目標達成に対するA子の感想(資料16)をみると「みんなでれん習した」「きょうかしんけんでやっていた」と記述している。「みんなで力を合わせた結果」という学級の頑張り・学級のまとまりを実感したことがわかる。

さらに「じょうずになるコツをみんなで考えてだしあって」と記述している。前回の作戦<チームでレベルアップ作せん>での「励まし合うことで、集団の力は向上する」というよさがA子の中に学びとして身につけてきたといえる。

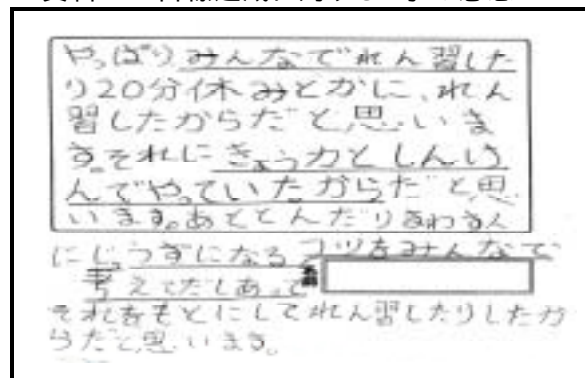
以上のことから、みんなで力を合わせて頑張ることで学級はまとまってきたという充実感を味わうことができたといえる。

作戦終了後「今の2組の協力レベルは10点満点中、何点？」アンケートをとり、合計を出した。作戦実行前のアンケートでは154点であった。作戦実行後では293点にまでアップした。児童から「これで協力も2組の

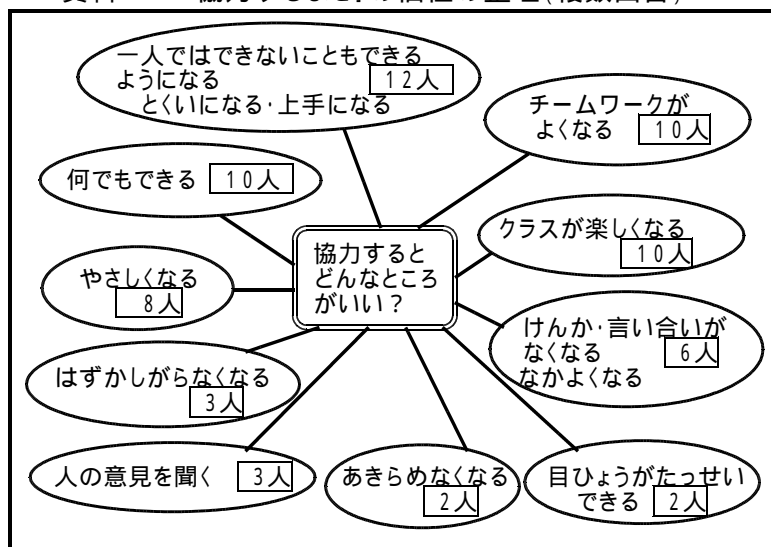
資料15 チャレンジ過程における感想の変容(学級)

記録	目標回数について	チャレンジの取組について (――は協力に関する言葉)
29回	思った以上にできなかった。 くやしい。 [8人]	もっとれん習しないと。 次はがんばらなきゃ。 [13人]
43回	ふえてうれしい。 [15人]	前よりすごくいい。もっとがんばるぞ。 はげまし合えた。 [17人] チームワークができた。 力を合わせるっていいね。 [6人]
50回	あと少し。おしい。 [17人]	よくできて、すごい。 しんけんにやってる。 力を合わせていた。教え合えてた。 きょう力できた。 [17人] [8人]
90回	すごくうれしいやったー。 よかった。よかった。 [29人]	しんけんだった。もりあがった。 もっとやりたい。 はげまし合えた。きょう力ってすごい。 チームワークできた。 [14人] [20人]

資料16 目標達成に対するA子の感想



資料17 「協力するよさ」の価値の整理(複数回答)



自まんになった」という声があがった。自分たちのやった活動に自信をもつことができたといえる。

さらに道徳の時間において「協力するよさ」の価値について学級全体で整理していった(資料17)。作戦前に児童が考えていた「協力するといいいところ」は、

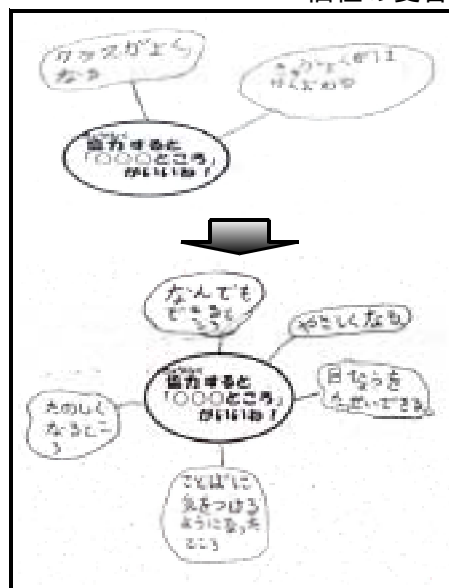
早く仕事が終わる(12人)	けんかしない(5人)
いい気持ちになる(4人)	

が上位だった。作戦後には、

一人じゃできなかつたことができるようになる・得意になる・上手になる	(12人)
何でもできる、チームワークがよくなる、クラスが楽しくなる	(各10人)
やさしくなる	(8人)

に変わっていった。早く終わるといった時間的なよさやけんかをしないという個を重視した価値が、人との関わりや学級の充実・まとまりという集団を意識した価値に大きく変化していったといえる。A子も2つから5つに価値の気づきが増えた(資料18)。これらの作戦によって、子供たちの心の中に「協力し合う」ことのよさがしっかりと根付いたといえる。

資料18 A子の「協力するよさ」の価値の変容



研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

係活動では「みんなのために、クラスを楽しくするために活動をする」ことを明確にし、自分たちが活動内容を考えて実行していったことによって、活動に意欲をもって取り組み、仕事をすることに楽しみや喜びを感じるようになっていった。

学習の教え合い活動を重ねていくうちに、お互いの力を認め合い、できなかったことができるようになったことを実感していった。相手に対する言葉遣いも考えるようになり、チームワークがよくなっていったことの素晴らしさを感じるようになった。

「もっとレベルアップ!」を望んで活動を考えて実行していくうちに、それまでの作戦で実感した「集団で取り組む喜び」「教え合いのよさ」が自然に子供たちの行動に表われ、声をかけあって取り組む学級に育っていった。

レベルアップ作戦の繰り返しにより、「集団で活動するには共通の目標をつくる 目標にむかう活動の方法を考える 目標が達成できたか、活動を振り返る」流れが、子供たちに学び方として浸透していった。

2 今後の課題

日常生活のなかで子供たちが、常に「自分たちで学級をつくる」意識をもって生活していくために、学級全体で取り組む活動の投げかけを続けていきたい。目標設定のための問いかけ、活動方法の宣言方法、振り返りに有効なカードの活用等、必要な手だての工夫・改善に努めていきたい。

<参考文献>

鈴木 健二・日向教育サークル著 『係活動で学級を活性化する』 明治図書(1995)